

お知らせ

🔔 「博物館のための外国人おもてなしITプランブック」
発行のお知らせ

訪日外国人の大幅な増加に伴い、いま、全国の商業施設や観光施設、文化施設では「おもてなし」のための対応を迫られています。しかしながら、中小規模の博物館は、大きな予算や体制変更を伴う対応は極めて難しく、外国語を話せるスタッフを揃えるのもそう簡単ではありません。外国語のパンフレットの作成・設置などに、できる範囲で努力されているようですが、日本を訪れる外国人の方々には、日本人以上にインターネットで情報を収集する傾向が見られます。よって、パンフレットやパネルだけでなく、ITを活用した「おもてなし」は、小さなコストで大きな効果をもたらす可能性を秘めていると言えるでしょう。

そこで弊社では、中小規模のミュージアムでも実現可能な「ITを活用した外国人のおもてなし」について、施

策やポイントなどを小冊子にまとめました。さまざまな専門家への取材などを通して得た実務的な情報を収録しておりますので、外国人対応をお考えのミュージアムの皆様に、少しでもお役立ていただければ幸いです。



- 判型/A4カラー
- 頁数/16ページ

【内容】博物館の外国人対応について/翻訳サービス/Wi-Fi 環境の整備/多言語対応のホームページ/多言語対応の展示アプリ/多言語の資料データベース/外国人対応アクションプラン

🔔 MMLジャーナル
発行のお知らせ

弊社では、博物館へのさまざまな情報サポートを目的とした「ミュージアムメディア研究所」を設立しました。各分野の専門家委に執筆を依頼し、事例紹介や調査レポート「MMLジャーナル」を発行していく予定です。

第1号から3号までは、特集記事として、いま注目度を増すオープンデータの動向について、特定非営利活動法人リンクトオープンデータイニシアチブ・副理事長の小林巖生様にご寄稿をいただきました。今後は、IT以外のジャンルにも広げつつ、業界全体の知識情報基盤の一部になることを目指して、活発に情報発信をしてまいります。

MMLジャーナルは、以下のサイトからお読みいただけます。無料ですので、ぜひどうぞ。

www.museummedialabo.jp/



🔔 弊社Facebookページ、
おかげさまで好評です

全国津々浦々のミュージアムを毎日訪れる弊社スタッフ。Facebookは、「〇〇博物館にお邪魔しました」という記事で埋め尽くされ、1年以上、一度も途切れることなく更新しています。

取材にご協力くださったみなさま、本当にありがとうございます。アクセスが増えるような楽しい記事の配信心がけつつ、みなさまの館のPRにほんの少しでも役立つことができればと思っております。スタッフが伺った際はぜひ取材させていただければと思っておりますので、今後ともよろしく願いいたします。



www.facebook.com/wasedasys
早稲田システム開発株式会社

✍️ 編・集・後・記

米スミソニアン博物館が、所蔵品のデジタル画像4万点をインターネットで公開。商用でなければダウンロード、再利用が無償ですから、すごいですね。

100年前、ラジオで音楽を流すようになった時、演奏家は猛反対したそうです。50年前、プロ野球のテレビ中継が始まる際には、球場へ足を運ぶ人の減少を懸念する声も多かったと聞きます。著作権についての議論はあるものの、文化資源のデジタル画像公開も、似た流れになるでしょうか。

MAPPS press

News Letter from MAPPS
2015.11
No.8

頑張り、ミュージアム。

発行元: 早稲田システム開発 株式会社
東京都新宿区新宿5丁目3番15号
TEL.03-6457-8585 FAX.03-3351-1660
www.waseda.co.jp/

CONTENTS

- 📷 参加レポート
第9回資料保存シンポジウム
平成27年10月5日 学術総合センター(東京・神保町)
- 🕒 ミュージアムITピック
博物館データを小学校の電子教材に
柏崎市が小学校で実験授業
- 📁 新機能プレビュー
ミュージアムと利用者ともに無料!
展示ガイドアプリ、サービス開始へ
- 🔔 お知らせ
博物館のための外国人おもてなしITプランブック



参加レポート

資料保存の研究会 シンポジウムは大盛況

当日は、会場に用意されたすべてのテーブルが埋まるほどの大盛況。正直、驚くほどの熱気でした。9回目を迎えたシンポジウム、今回は「後世に伝えるための資料保存とデジタルアーカイブー資料の保存と今後の展望ー」がテーマで、情報の保存や修復、そしてデジタル化などの最先端情報をじっくりと学べる場。情報保存研究会(JHK)、そして公益社団法人日本図書館協会の共催による注目のイベントです。

会場は神保町にほど近い「学術総合センター」。国立公文書館の加藤丈夫館長の基調講演「公文書の重要性と次世代に伝えていくことの大切さ」をはじめ、関西大学総合情報学部准教授の研谷紀夫氏、東京都立中央図書館資料保全専門員の眞野節雄氏のお二方による特別講演というラインナップ。いずれも専門家の皆さんによる極めて深い内容で、メモを取ることで精一杯。ご参加の方々の真剣そのものな表情も印象的でした。

講演後は、企業展示と資料保存のための実用講座が開催されました。今年も企業展示コーナーを設けて参加者と企業の技術員が具体的な話を展開していました。企業展示は7~8社と言ったところでしょうか。出店できなかった企業のカタログを集めた「カタログコーナー」もあって、エキスパート企業のプレゼンテーションも、こちらも活気に満ちていました。会場の場所柄なのか、講演が始まってから来場者が絶えないほどの人気ぶり。休憩時

第9回資料保存シンポジウム

後世に伝えるための資料保存とデジタルアーカイブー資料の保存と今後の展望ー

2015年10月5日(月) 9:50~18:00

間中は人で溢れていて、圧倒されました。

弊社も会員企業の1社ですが、今回は一般参加。次回は展示や発表の機会をいただき、情報の保存と継承に情熱を燃やす仲間たちと交流を図りたい...と思わずにはいられない1日となりました。



情報保存研究会(JHK)とは

公文書館や図書館、博物館をはじめとする情報保存機関などの発展振興に寄与することを目的に、2000年4月に発足した団体です。ご紹介した資料保存シンポジウムは2008年から開催されており、資料保存における学識経験者や実務担当者らの講演が直接拝聴できる貴重な機会。また、多数の専門家による情報の保存・活用技術の解説を収録した冊子も発行していますので、ぜひWEBサイトをご確認ください。

www.e-jhk.com/



ミュージアムITトピック

博物館データを小学校の電子教材に 柏崎市が小学校で実験授業

事例研究



「一人1台タブレット」というこの時代、教室で活用されるのは必然。特に、郷土の歴史や文化を学ぶには、博物館資料とそのデータベースは子どもたちの学びのお供になれるはず。柏崎市のWEBミュージアム構築プロジェクトは、これを実証する先進的な試みです。

博物館と学校が連携すれば、子どもたちの知的好奇心を大きく育むことができるはず。ずっと昔から指摘されてきたことで、全国

のミュージアムを巡回しながら「博物館力」を日々肌で感じている弊社も、それは確信しています。しかし、これを実現するには、さまざまな課題もありました。

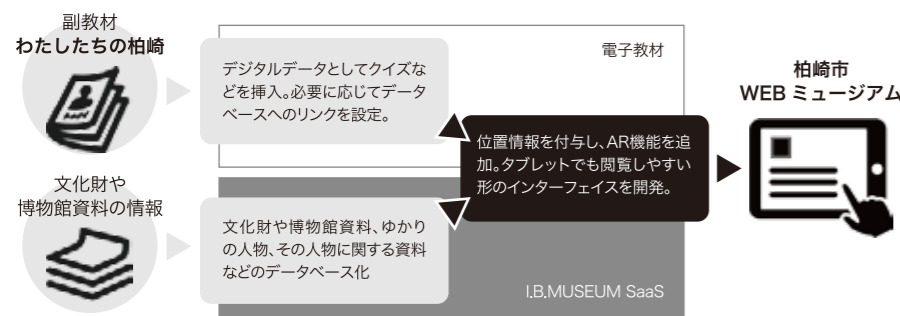
互いに連携したくても、まずスケジュールの調整からして難題です。引率時の安全確保では、先生方、博物館職員の皆様ともに負担が大きいのも事実。これらの問題などに阻まれて、残念ながら、なかなか簡単には進まないのが現実でした。

教育現場でICT活用しようという試みは、いまや全国的な流れ。新潟県の柏崎市では、現在、「柏崎市WEBミュージアム」構築プロジェクトを進行中。小学生向けの郷土学習教材の電子化と、市内の文化財や博物館資料のデータベース化を軸とする電子教材の開発プロジェクトで、来年3月の完成を予定しています。

それに先駆けて、先ごろ、試験的な授業を実施。結果は上々で、博物館資料の活用先の可能性を改めて示す事例となりました。そこで、今回はこのテスト実施についてレポートします。

その点、教室内で電子教材を使うという方法なら、そうした問題の大半がクリアされることとなります。資料データとそのデータベース、そしてアクセス環境さえ整えば、より効率的な郷土学習が実現できることは間違いありません。

これまで思い描いていた「デジタルデータによる博物館と学校の連携」の、その効果やいかに、このたびのテスト実施の様子を目の当たりにできる貴重な機会に恵まれたので、詳しくご報告しましょう。



電子教材の概要

授業には、現在開発中の「柏崎市WEBミュージアム」が使われました。このコンテンツは、これまで副教材として使われてきた馴染みのある紙の冊子を電子化したもの、博物館が所蔵する地域の文化資料のデータベース、そして新たに作成した特集記事を内包。データベース部分には、弊社のI.B.MUSEUM SaaSをご活用いただいております。

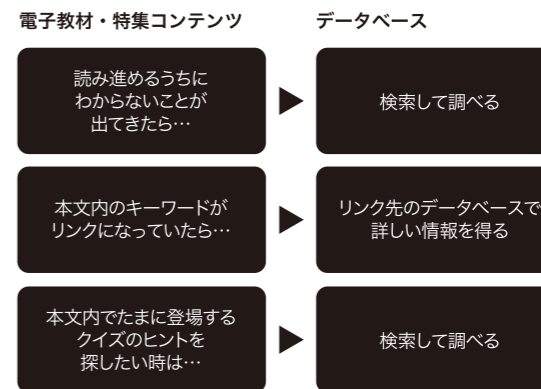
これらの教材は、「WEBミュージアム」のトップページに統合された形となっています。重要なキーワード、人物名などがリンクになっていて、タブレットの画面にタッチするとデータベースの該当部分が表示されます。また、特集コーナーでは、読み進めていくと時おりクイズが登場するなど、飽きさせない工夫も盛り込まれています。



大きくわけて3つ柱からなるコンテンツは、それぞれ別の資料から作ったもの。こうして統合すると、言わなければ気づきませんね。

電子教材とデータベースの連携

- 私たちの柏崎 (電子教材)
- 柏崎の偉人と文化財 (データベース)
- 特集ページ
 - 地域の発展に尽くした人々
 - 伝統行事と人々の願い
 - 昔の道具を見てみよう!
 - 柏崎の経済・産業の歴史



point タップしてみたくなるカラー、デザイン、レイアウトで好奇心をサポート

子どもたちが使うツールは、まず、見た目が重要。とっつきにくさを排除したカラフルでポップな画面デザインは、子どもたちの知的好奇心を刺激するのにぴったり。データベースでは、地域学習の授業に使いやすいよう、「校区」からも検索できる点もポイントです。

ご注目いただきたいのは、「私たちの柏崎」がテーマごとに色分けがされていること。実は、これがあとで大きな効果を発揮するのです。



モノクロ印刷ではわかりませんが(汗)、画面はかなり色とりどり。気安くタップしても大丈夫だよ、という雰囲気大切ですよ。

■電子教材を使った授業の様子

当日の授業のテーマは、地元の農業について。生産高と作業時間の推移について統計から確認し、数字が変化し理由(機械化など)とともに相関関係をみんなで考えます。子どもたちは、みんな熱心に考えています。

そのあと、電子教材で農業についてのページを開くと、地元の農業、特に治水に貢献した人物が紹介されています。それをタッチするとデータベースの人物の詳しい情報へとジャンプ。そこからさらに、その人物が関わった頃の情報へ。その画像を拡大すると、たくさんの人が関わっていたことが絵でわかる…といった具



合に、子どもたちは器用に使いこなします。

当時の人々の苦労した様子を画像で見ることができ、子どもたちは興味津々。仮に、議論が



自熱して周辺的话题に飛んだり、その場に資料がない質問が出て、先生はすぐに検索できるので安心ですね。

●当日のまとめと、今後に向けて…

実験授業を終えて、担当の先生もほっと一息。手ごたえや感想など、いろいろとお話を伺う時間をお借りました。

先生によれば、タブレットを使った地域学習は、やはり子どもも興味を持ちやすいようです。紙の資料とは異なり画像を大きくして見られるなど、よりアクティブな授業も可能。また、キーボードが苦手な子どももタッチモニターなら扱いやすいので、学習意欲を保ちやすいようです。

また、オーソドックスな方法ではありますが、クイズ形式はとても好評でした。伝統芸能の動画などは、地元の方でも見たことがないような貴重な資料もあり、WEBミュージアムとして学校以外での公開も検討できるかもしれません。

さて、このように便利なタブレット授業ですが、慣れてくるにしたがって、「授業と関係なく、どんどん勝手に進んでしまうかもしれない」という心配もあります。実は、これは事前に対策を講じてありました。それが、前ページで紹介した「色分け」なのです。

今回のインターフェイスでは「単元ごとにキーカラーを変える」というスタイルをとっています。これなら、先生が少し離れたところから見ても、その子がどのページを見ているかが「色でわかる」…という仕掛け。先生のお話によると、これはなかなか効果を発揮したようです。

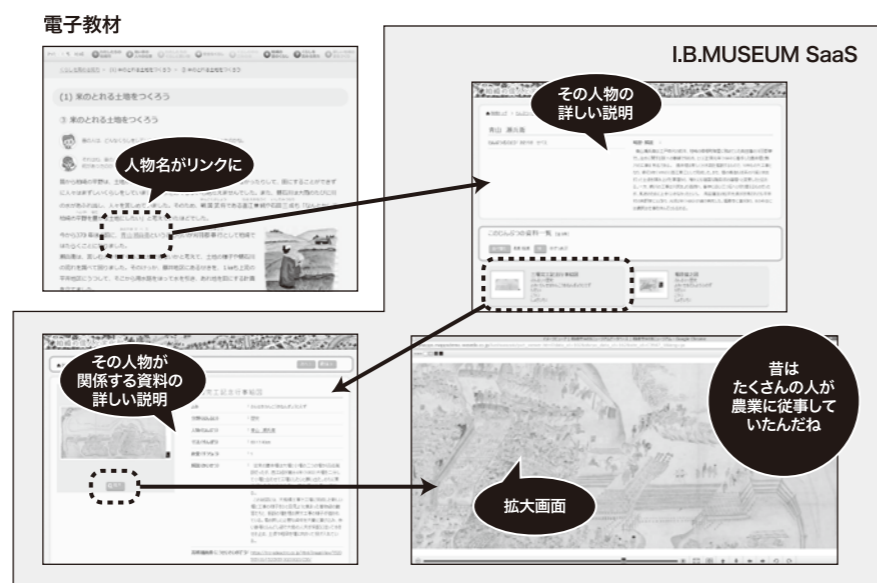
データベースを使った「調べる学習」は、6年生になると「地元をPRする」という授業があるそうです。また、先生方も授業の準備に使えるなど、活用の幅はまだ広がると、そんな感触を得ることができました。

この日、何よりも印象に残ったのは、先生の周到な準備でした。授業のシナリオがとてもよく練られていて、「学校の先生は大変だ」という伝聞を改めて目の当たりにした思いです。

今回は昔の農業について学んでいましたが、博物館に行けば、もしかしたら当時の農機

具などが保存されているかもしれません。データベースに何が格納されているか、実物資料にどんなものがあるかなどは、学芸員が知り尽くしています。どちらもご多忙ですが、先生と学芸員が二人三脚で授業の準備に臨むことができたなら、博物館資料の価値はもっと深まるはず。ぜひ仕組みづくりを考えたいものです。

ICTを用いた新しい授業スタイル、地域学習の効果アップ、文化資源の教育への活用。いずれの視点からも、今回の柏崎市の取り組みには拍手を送りたい、そんな授業見学でした。



新機能プレビュー

ミュージアムと利用者ともに無料！
展示ガイドアプリ、サービス開始へ



運用開始以降、多数の追加機能を実装してきた博物館クラウド<I.B.MUSEUM SaaS>。来年1月末、ぜひご注目いただきたい機能が増えることになりました。

その名も、展示ガイドアプリ「ポケット学芸員」。スマホ時代にふさわしいサービスを、追加料金なしでご利用いただける博物館クラウドの新機能。今回は、その内容をご紹介します。



ミュージアム

最近、増えてきたiBeaconやBluetoothを使ったプッシュ型の展示情報提供アプリ。とても便利なサービスなのですが、ミュージアム、利用者ともに悩みも…。

予算があればウチもやりたいけれど、独自アプリを構築する予算なんかつかけられない。人手も足りないしね…。



利用者

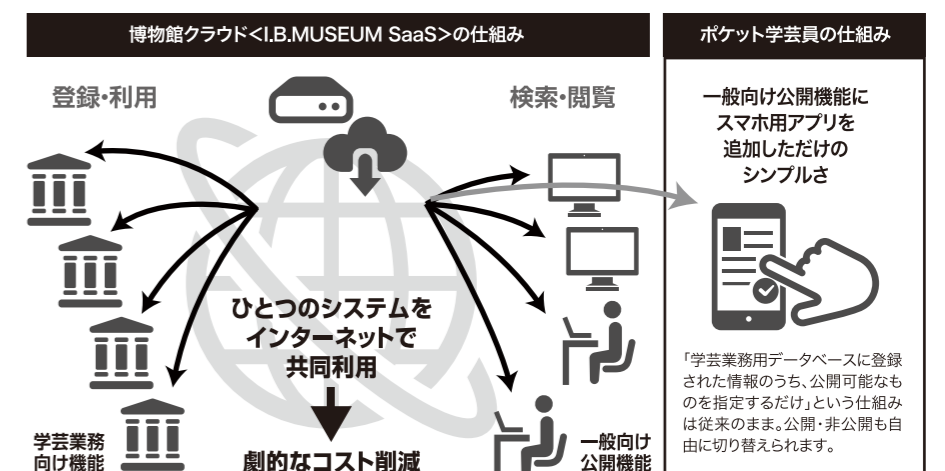
面白そうだけど、毎月行くわけじゃないから…。全部入れたら、スマホがミュージアムアプリだらけになっちゃうな～。

ポケット学芸員なら
双方ともに解決！

point ミュージアムのメリット ~ 構築費用がかかりません

クラウド型システムはインターネット上にひとつのシステムを置き、多数のユーザが利用します。個別に開発するシステムと違って、開発費用は「割り勘」になるため、ITコストの削減には大変大きな効果を発揮する仕組みです。

博物館クラウド<I.B.MUSEUM SaaS>は、すでに30回以上の機能追加をしてきました。機能が追加されても、クラウドの利用料は増えません。展示ガイドのスマートフォンアプリもクラウドの機能追加ですから、ご利用館は「これまで通り」のゼロコストになるわけです。



point パッと見ればひと目でわかる! シンプルな操作画面もポイントです。

アプリを立ち上げたら、トップ画面で「施設を選ぶ」をタップ。見たい施設を選択すると、施設の紹介画面が開きます。そのミュージアムの

プロフィールを知ったところで、「ガイドへ」というボタンをタップしたら、テンキー画面が開きます。展示のそばに表示されている番号をタッチ

すれば、その番号のガイドが表示される…という流れです。特に説明が必要がないほどシンプルな操作も特徴です。



例えば、こんな使い方

■展示室での展示資料解説

これが最もスタンダードな使い方となるでしょう。解説のナレーションを登録するだけで音声ガイドが出来上がります。利用者は番号を入力するだけで、お手持ちのスマートフォンを音声ガイド端末として使えるのです。

また、解説だけでなく、立体物なら展示では見ることができない裏側の写真、生き物に関する展示ならその鳴き声の音声や自然界で活動している映像、生活用具や産業機械ならそれが使われているところの映像などを提供可能。館内を巡回する楽しさ、そして展示に対する理解の幅も広げていただけるわけです。

■野外展示

野外彫刻など、解説のキャプションを掲げづらい展示にも、ポケット学芸員が活躍します。たとえば屋外に彫刻作品を展示している場合、その作品が記載された地図を用意し、そこに展示番号を掲示しておけば、詳しいガイド付きの鑑賞体験に早変わりします。

■展示室の紹介

たとえば展示室ごとにテーマが異なる場合、その部屋に関する情報を提供することもできます。登録側のシステムである<I.B.MUSEUM SaaS>は資料のデータベースが根幹ですから、展示室の情報はそのままでは登録できませんが、大分類に「展示室」を作ることで対応可能。展示室1室を資料1点に見立ててデータを作成しておけば、展示室の情報を登録し、アプリで案内することができます。



ミュージアム

特殊な機材が必要なくて準備が最小限で済む!

アプリはひとつで操作も簡単!



利用者



point サービスの実施準備にコストがかからず、手間も最小限

使い方は、I.B.MUSEUM SaaSを使って情報をインターネットで公開する時とほぼ同じ。文字の解説の場合、ネット公開データとアプリ上の文章が同一で問題なければ、すでに登録済みのテキストデータを流用可能。加工や編集などの作業は、一切必要ありません。画像も同様で、アプリ用に新たに用意する必要はなく、すでに登録されている画像がスマートフォンの表示に適したサイズで公開されます。

さて、注目の音声ガイド機能ですが、こちらは音声ファイルを用意します。データさえあれば、フォルダを開いてファイルを指定するだけで登録できるので、とても簡単です。

また、スマホ内のアプリでは、YouTubeとの連携も可能です。YouTubeにアップした動画のURLを登録しておけば、スマホに表示される画面内には動画がはめ込まれた状態になりますので、ユーザはそのまま鑑賞することができます。館側は、公開する資料の詳細画面で「アプリに公開」にチェックを入れるだけ。あとは、アプリ内に館を紹介するページがありますので、原稿を登録。コストだけでなく、手間も最小限で済みます。

アプリの使用は、インターネット接続環境が必要です。展示室の電波状態が悪い時は、Wi-Fi用の設備があればOKです。また、日本語

以外の言語にも対応しているため、日本の携帯電話キャリアと契約しないことが多い外国人観光客のためにも、Wi-Fiは準備しておいた方がよいでしょう。

このアプリは、利用者の「番号入力」で資料を特定し、ガイドを表示しますので、展示物のそばに番号を掲出しておくとも良いでしょう。あとは<I.B.MUSEUM SaaS>にも展示番号を登録して、準備はほぼ完了です。



ナレーションの録音だけなら検討できなくもない

point ひとつのアプリで複数ミュージアムのガイドをゲット

博物館クラウド<I.B.MUSEUM SaaS>は、すでに170館以上で利用されています(平成27年10月現在)。これらのご利用館からは、すでに「ぜひ使ってみよう」という声をお寄せいただいておりますので、来年1月末のサービス開始時点で「数十館で使えるアプリ」となっているものと見込まれます。

これを利用者の目で見ると、「このアプリがあ

れば、数十館分のミュージアムの展示ガイドが使える」ということになります。

スマホを活用するほどに増え続けるアプリは、ちょっとした悩みの種となっている人も。「ひとつでOK」という特徴は、とても便利なものとしてご認識いただけることでしょう。また、他館とともに自館の基本情報が配信されることになるので、ちょっとしたプロモーション媒体にも

<I.B.MUSEUM SaaS>のご利用館の増加とともに増えていくはずなので、今後が楽しみな機能となりそうです。

これなら気軽に使えそうね!



利用者

●ネーミングのヒミツ

展覧会で学芸員の話を開けると、展示を見て回る面白さがまったく違います。学芸員のみなさんも、来館者の方々のそんな気持ちに気づいている方が少なくありません。とは言え、すべての来館者の横について案内するのは、物理的に無理な話ですね。

本物の学芸員の肉声が聞けないなら、その代用となれる機能を。ポケットに入るサイズの「ミニ学芸員」がたくさんいて、来館者一人ひとりの耳元でご案内して差し上げることができたら…。そんな思いから、「ポケット学芸員」という名前がつけました。



coffee break

「学芸員が直接解説してくれると、展示を見るのが10倍楽しい」。そんなことを強く実感するようになったのは、実は会社でFacebookを運営するようになったのがきっかけのひとつでした。なぜかと言えば、打ち合わせの後、展示を見せていただく機会が増えたから。これはまさに「役得」そのものです。

博物館に限らず、「その道のプロ」の話は、やはり面白いものです。しかも、目の前に展示があるのですから、その威力は倍増。帰宅して家族に話さずにはいられないくらい、強く印象に残ります。

最近、「企業は人だ」という理念を掲げる企業経営者が増えてきました。博物館も同じ…いや、むしろ一般企業以上かも。「博物館は学芸員」だと、いつも思います。これが、「ポケット学芸員」の企画の原動力となりました。